
原 著

日本の女子ラグビー統括組織創立 (1988年) 以前設立の 女子ラグビーチームに関する検討

— 1979年から1982年までに東北地方で設立されたチームに着目して —

兼松 由香 (東海学園大学 / 中京大学大学院)
來田 享子 (中京大学)

Study on Women's Rugby Teams before Creation of a Women's Rugby Governing Body (1988) in Japan — Teams Established in the Tohoku Region from 1979 to 1982 —

KANEMATSU Yuka
(Tokaigakuen University / Graduate School, Chukyo University)
RAITA Kyoko
(Chukyo University)

Abstract

The purpose of this study is to review women's rugby teams in the years before 1988, when the Japan Women's Rugby Football Federation (J.W.R.F.) was created, and to elucidate the systematization process of women's rugby in Japan.

Traditionally, it has been stated that the history of women's rugby in Japan started in 1983. Previous studies showed that women's teams were established in three cities, i.e., Tokyo, Nagoya and Matsusaka, in 1983. These three teams played matches in 1984, which are believed to be the first matches by women in Japan. On the other hand, it was also indicated that the mothers of children who attended rugby schools (RS) in Osaka and the Tohoku region played before 1983 (J.W.R.F., 2003), although the details have been unknown.

In this paper, we consider the following two points:

- 1) Confirming the existence of women's rugby teams established before 1988, and
- 2) Clarifying the women's rugby teams established before 1982 including members of the teams, the reasons why the teams were established, details of their activities, and their views on rugby.

The results of this study are summarized as follows:

- 1) Twenty-six women's rugby teams had already been established in Japan before 1988. Seven teams were established before 1982, five of which were in the Tohoku region. The study suggests that the earliest women's rugby team established in Japan was a girls' team that was created within the Osaka RS in 1968.
- 2) The women's rugby teams established in the Tohoku region between 1979 and 1982 consisted of housewives, mostly mothers who sent their children to RSs. Some of the teams were set up at the recommendation of RS coaches. They played with RS children. The earliest rugby match between women in Japan took place in 1980 between the Shishiori and Onagawa teams. They played rugby to enjoy the sport, interact with one another and promote their health through rugby.

The women's rugby teams established in the Tohoku region between 1979 and 1982, which are the focus of this paper, were "Mama's teams", where housewives, mainly mothers, enjoyed playing rugby as a recreational activity.

1. はじめに

(1) 本研究の背景と意義

本研究は、1988年の日本女子ラグビーフットボール連盟（Japan Women's Rugby Football Federation、以下当時の略称である「J.W.R.F.」と記す）創立以前の女子ラグビーチームの活動および国内における女子ラグビーの組織化について歴史的に明らかにしようとするものである。J.W.R.F.は、国内の女子ラグビーフットボール（以下「女子ラグビー¹⁾」と略す）統括組織である。本稿では、1979年から1982年までに東北地方で設立された女子ラグビーチームに着目し、検討を行う。以下に、本研究の背景となる先行研究の状況および本稿の意義を述べる。

日本のラグビーは、1899年に慶応義塾大学に赴任したE.B.クラークとケンブリッジ大学留学中にラグビーをプレーしたクラーク氏の友人、田中銀之助が塾生たちにラグビーを教えたことが始まりとされる²⁾。1901年には、日本で最初の試合が行われ³⁾、1926年には日本ラグビー蹴球協会、現在の日本ラグビーフットボール協会が発足した⁴⁾。これらの歴史には男子ラグビーの歴史とは明記されていないものの、女性の存在は確認できず、社会においてラグビーが男性スポーツとして自明視されていたことが示唆される。

世界の女子ラグビーの歴史をみると、ニュージーランドでは既に1890年代には女子ラグビーチームが設立され、フランスでは1920年代に女子ラグビーの試合が実施されていた⁵⁾。国際的な女性スポーツの歴史を4つの時期に区分した研究成果によれば、1900年代から1940年代中頃は、スポーツへの女性の参加拡大の時期と位置づけられ⁶⁾、イギリス、フランス、ニュージーランド、オーストラリアで女性たちがさまざまなスタイルのラグビーを始めている⁷⁾。イギリス発祥のラグビーは、イギリスの植民地地下にあった国々を中心に拡まっていった⁸⁾ため、女性たちへのラグビーの普及も同様にそれらの国々が先行したと考えられる。

女性スポーツの歴史に焦点をあてた研究^{9), 10), 11)}によれば、日本で女性スポーツが導入されたのは1890年頃とされている。乗馬やテニスからはじまり、女学校での課外活動の活発化とともに、多くのスポーツ種目が享受された。1919年には高等女学校野球大会、1920年代には庭球、排球、陸上競技、籠球、水泳、卓球の全国大会が開催された。また、サッカー（アソシエーションフットボール）は、1916年に大分県、1919年に香川県の高等女学校内で実施されていたことが、崎田ら¹²⁾によって明らかにされている。しかし、『女子の運動競技』（1923）第6章の冒頭は、「女子の蹴球（フットボール）は現在日本に於て、決して普及してゐるとは申されません、それは此の競技が、幾分の過激味を伴つてゐるからではありませんまいか。」から始まり、女性の体質に適合しないとされている¹³⁾。さらに、1922年5月に設立された福岡県立直方高等女学校野球部は、同年11月に出場した豊前田川郡後藤寺町主催の少年野球大会では優勝を収めながらも、その翌月には、運動に無理解であった県知事により、女子の野球が禁止されている¹⁴⁾。このように、女子には過激であるという理由で禁止された種目や女性には認められなかった競技は、男性に比して、普及の時期が大きく遅れたと考えられる。

女性スポーツの参加率が急上昇したのは、1960年代から1970年代の高度経済成長期である。笹生¹⁵⁾は、ボウリングの女性参加率上昇について、女性をターゲットとした経営戦略により、ボウリング場が多く整備されたことが要因であると述べている。また、1970年代から人気を集めた「ママさんバレー」こと家庭婦人バレーボールについて、高岡¹⁶⁾は、地域活性化への効果的で具体的な施策としての位置づけであったと述べている。このように1960年代から1970年代以降、経営戦略や地域活性化を目的とした主婦層中心の女性スポーツが普及された。

一方、1966年12月23日発行のアサヒグラフ誌には、日本における初めての女子サッカークラブ「福住女子サッカースポーツ少年団」結成の記

録¹⁷⁾があり、東明らの研究¹⁸⁾でもこれが支持されている。また、西山¹⁹⁾によると1964年以降は東京五輪をきっかけにサッカーブームが起り、中・高等学校の女子生徒の中には、従来のように見るだけでは満足できず、校内に組織されたクラブ、あるいは各地のサッカー・スクールに参加するようになったとされる。これら先行研究により、国内における女子サッカーは、戦前から実施されていたものの、本格的に普及され始めたのは、1960年代以降であったことがわかる。その時期は、先に参照した女性スポーツの4つの時期の区分けにおける「女性スポーツ」の拡大の時期（1940年代中ごろ～1970年代）²⁰⁾、すなわち女性には無理だとされてきたスポーツに女性たちが挑戦し始めた時期の後半にあてはまる。

女子ラグビーのはじまりについては、J.W.R.F.が発行した『女子ラグビー15年の歴史』（2003）には、1983年が女子ラグビーのはじまりとされ、女性たちが本格的にスポーツ競技として始めたことと記述されている。この資料では、同年に東京・名古屋・松阪でチームが設立され、翌年にはこの3チームによって初めての女性同士の試合が行われたことを「スポーツ競技としての」起点であると解釈している²¹⁾。この解釈は、『日比野弘の日本ラグビー全史』（2011）²²⁾でも踏襲されている。一方、同記念誌には、それ以前に大阪や東北でラグビースクールに子どもを通わせていた母親たちがラグビーを実施していた²³⁾ ことについて、詳細には触れられていないものの記述がみられる。こうした記述は、たとえ草の根的であったとしても、女性たちがいつ、どのようにしてラグビーに挑戦し始めたかについて、1982年以前に遡って検討し得ることを示唆している。

本研究の目的のために、本稿では、以下2点の具体的な課題を設定した。第一は、1988年以前に設立された女子ラグビーチームのチーム数、設立年、所在地を明らかにすること、第二は、第一の課題によって明らかになったチームのうち、1982年以前に設立されたチームについて、チームの構成員、設立の契機、活動状況、女性たちのラグ

ビー観について検討することとする。これらの課題を明らかにする中で、なぜこれまで1982年以前の状況が女子ラグビー史上に浮かび上がってこなかったのかについても問題意識として置くことにしたい。

本研究は、これまで着目されてこなかった1988年以前の日本女子ラグビーの歴史をたどる第一歩である。前述のとおり、女性スポーツのうち球技に関しては、サッカーや野球では戦前の高等女学校内での実施や1960年代以降の地域クラブでの普及、バレーボールでは1970年代以降の主婦層への普及といった先行事例がみられる。本研究により、これらの他の球技における先行事例とラグビーとの比較も可能になると考えられる。なお、本研究の意義は、1988年以前に活動した女性たちの高齢化に伴い、彼女たちが保有する史資料の散逸を防ぎ、証言記録を残す点にもある。

(2) 研究の方法

本研究では、主に2つの方法によって検討を行った。第一は、1988年以前の国内の女子ラグビーに関する史資料の検討、第二は、1988年以前にラグビーを始めた女性や女子ラグビーの関係者への聞き取り調査である。

上述の第一の課題では、主に以下の3つの史料を用いる。

史料(1) 女子ラグビー実績調査アンケート回答用紙²⁴⁾と回答一覧表²⁵⁾(以下「女子ラグビー実績調査アンケート結果」と略す)(1985年)²⁶⁾

史料(2) 全国女子ラグビー連絡会結成の案内文(以下「連絡会結成案内文」と略す)(1987年)²⁷⁾

史料(3) 第1回関東地区女子ラグビー交流大会(以下「第1回女子ラグビー交流大会」と略す)のパフレット(1988年)²⁸⁾

史料(1)は、1985年に世田谷レディースが全国の女子ラグビーチームを対象に実施したアンケートで得られた回答である。このアンケートは、1984年に世田谷レディース、ブラザー工業レディース

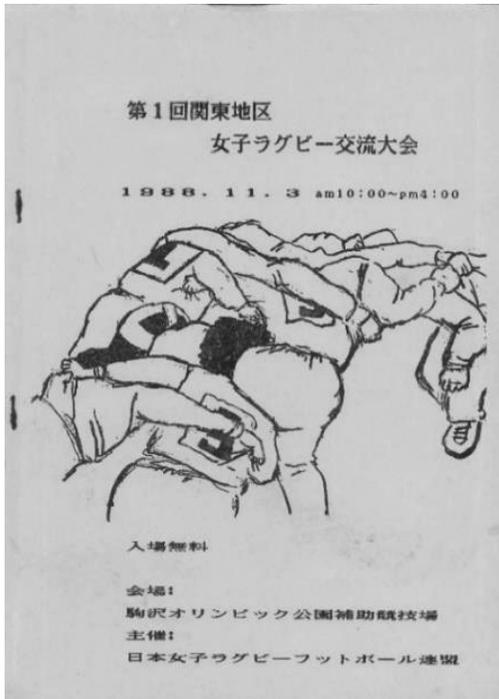


写真3 第1回関東地区女子ラグビー交流大会
パンフレットの表紙（1988）

ンフレット』である。この大会は、国内における初の全国規模の女子ラグビー大会であった³¹⁾（写真3）。

これらの3つの史料を検討することにより、1988年以前に設立された女子ラグビーチームのチーム数、設立年、所在地を明らかにする。その際、1990年代にJ.W.R.F.に携わり、主に資料作りを担当していた高濱直子氏による『日本女子ラグビーフットボール連盟登録チーム・人数の変遷1988～1996』（1996）³²⁾も参照する。

第二の課題では、第一の課題の検討によって明らかになったチームのうち、1982年以前に設立されたチームの具体的な活動実態を描き出すために、女子ラグビーチームが所属していたラグビースクールの記念誌および当時の新聞記事を検討する。記念誌は、盛岡ラグビースクール³³⁾、女川ラグビースクール³⁴⁾、秋田市エコー少年ラグビークラブ（以下「秋田エコー」と略す）³⁵⁾の3つのラグビースクールが発行したものである。

また、これらの資料から得られた情報の正確性を高めるため、1982年以前にラグビーを始めた女性に聞き取り調査³⁶⁾を行った。対象者は、女川ラグビースクールママさんチーム（以下「女川ママさん」と略す、後の女川レディース）に在籍していた阿部裕子氏である。阿部氏は、同チームの設立当初から約12年間チームに在籍し、チームの設立経緯、活動状況、消滅に至るまでの経緯を知る重要な人物である。尚、本調査は、中京大学倫理審査委員会による承認を得て行った³⁷⁾。

以上の通り、本稿では上記の3つの史料と聞き取り調査で得られた証言を中心に、ラグビースクールの記念誌や新聞記事も適宜使用しながら考察する。

2. 1988年以前に設立された女子ラグビーチーム

(1) 設立年月とチームの変遷

J.W.R.F.は世田谷レディースに在籍していた4名の女性を中心に1988年4月に創立された³⁸⁾。この出来事についてとりあげた新聞記事³⁹⁾には、J.W.R.F.に登録した16チームが紹介されていた。また、同年11月に開催された『第1回女子ラグビー交流大会のパンフレット』⁴⁰⁾には、出場した13チームが紹介されていた。これら2つの史料に記載されていたチーム名と所在地から、11チームの重複がみられ、J.W.R.F.は1988年時点で、少なくとも18チームの存在を確認していたと考えられる。また、両資料をみると全て1983年以降に設立されたことが読み取れる。

そこで、さらに古い史料である『女子ラグビー実績調査アンケート結果』と『連絡会結成案内文』を検討した。『女子ラグビー実績調査アンケート結果』には15チーム、『連絡会結成案内文』には16チームの名前を確認することができた。そのうち、両史料に記載されていたチームは、9チームであった。上記4つの史資料と『日本女子ラグビーフットボール連盟登録チーム・人数の変遷1988～1996』（1996）を参考にし、1988年以前に設立された全ての女子ラグビーチームの設立年

月、設立時のチーム名、所在地を示す表1を作成した。

表1に示したとおり、1988年以前に、国内には26⁴¹⁾の女子ラグビーチームが設立されていたことが明らかになった。また、1982年以前に設立されたチームが、7つ存在したことを確認できた。つまり、国内の女子ラグビーの歴史は、女子ラグビーのはじまりの年と位置づけられていた1983年より15年遡り、1968年には女子ラグビーチームが存在していた可能性がある。『女子ラグビー実績調査アンケート結果』からは、大阪ラグビースクール内に設立された女子チーム（以下「大阪RS女子」と略す）は、1968年（昭和43年）に中学生以下の女子チーム、1972年（昭和47年）に女子卒業生チーム、1975年に（昭和50年）に「ママチーム」であったことが読み取れた⁴²⁾。

チーム名に着目すると、「ママさん（マミー）」や「レディース」の語を含むチームが多くみられる。1982年以前に設立されたチームのうち「ママさん」は大阪RS女子内の「ママチーム」を含む5チーム、「レディース」は0チーム、1983年に設立されたチームのうち「ママさん」は4チーム、「レディース」は3チーム、そして、1984年以降に設立されたチームは「マミー」が1チーム、「レディース」が6チーム存在する。

注目すべき点は、1988年以前に4チームが名称を変更し、そこに一定の傾向がみられることである。具体的には、「盛岡ラグビースクールママさんチーム（以下「盛岡ママさん」と略す）」「女川ママさん」「三宅ママラガーズ」「ブラザー工業女子ラグビー部」の4チームが、J.W.R.F.登録、あるいは第1回交流大会出場時には、チーム名を「レディース」へと変更している。

以上から、1988年以前には26の女子ラグビーチームが設立され、そのうち7チームが1982年以前に設立されていたことを確認することができた。J.W.R.F.の創立を報じた新聞記事⁴³⁾には、7チームのうち3チームが紹介されていた。しかし、そこでは設立年に関する言及がなかった。また、『第1回女子ラグビー交流大会パンフレット』

には、「盛岡レディースラグビーフットボールクラブ（以下「盛岡レディース」と略す）」と「女川レディース」の名称でチーム名が記載され、いずれも設立年が1983年以降の年が記載されていた。つまり、資料上は、1982年以前に設立された盛岡ママさんと女川ママさんとは別チームとして判別される状態であった。こうした資料の状況が、1982年以前に設立されたチームの存在を見えづらくしたと考えられる。

(2) 所在地

先の検討により明らかになった1988年以前に設立された26の女子ラグビーチームの所在地を、日本地図に示した（図1）。

この図では、1982年以前に設立されたチームを●で示し、1983年から1988年までに設立されたチームを○で示した。この図から、1982年以前に設立されたチームは、近畿と東北地方に集中していたことがわかる。前節で検討した設立年とあわせて考えると、最も設立が早かったのは近畿地方の2チーム、続いて東北地方の5チームであった。

1988年には、女子ラグビーチームは、東北から九州まで幅広い地域に点在するように広がっている。複数チームが比較的狭い範囲に固まり、拠点ともいえる地域がある一方、単独チームがぼつんと存在している例もあることがわかる。

以上、第2章では1988年以前に設立された女子ラグビーチームの設立年と所在地について検討した。ここでの検討の結果、1988年以前には全国に26チームが設立され、1982年以前には近畿・東北地方で7チームが設立されていたことが明らかになった。この状況は、J.W.R.F.が1983年以前に大阪・東北で母親たちがラグビーを実施していた⁴⁴⁾と記述していたことを支持する結果となった。しかし、実施していた女性たちが母親であったのかどうかは不明である。

そこで、次章では、1982年以前に設立されたチームのうち、比較的多くのチームが固まって存在していた東北地方の女子ラグビーチームに着目

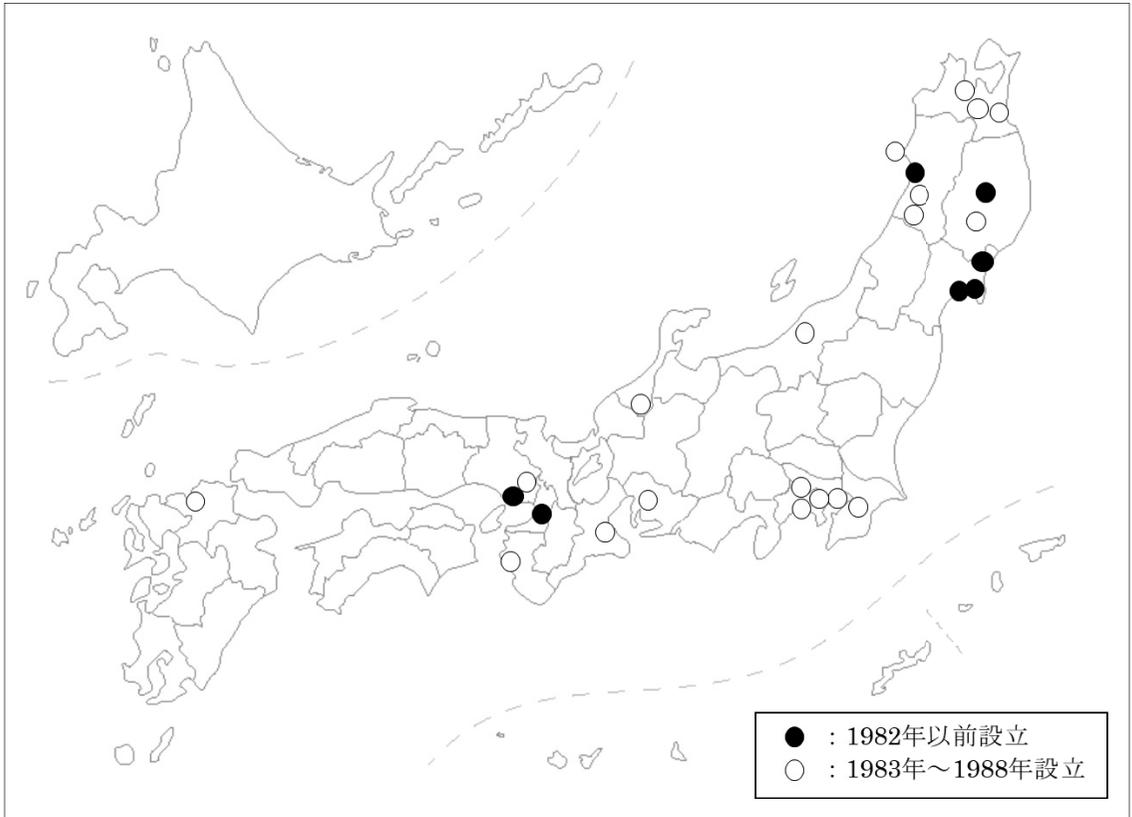


図1 1988年以前に設立された日本の女子ラグビーチームの分布図

し、検討を深める。

3. 1979年から1982年までに東北地方で設立された女子ラグビーチーム

前章の検討により、東北地方では、1979年から1982年の4年間に5つの女子ラグビーチームが設立されていた。そこで、本章では1979年から1982年までに東北地方で設立された女子ラグビーチームに着目し、これらのチームがどのような女性たちで構成され、どのような経緯で設立され、どのような活動を行っていたかについての実態を明らかにする。『女子ラグビー実績調査アンケート結果』に記された情報を分析の対象とし、これらに加え、ラグビースクールの記念誌や新聞記事等の周辺資料と聞き取り調査で得た証言も用いることとする。

(1) チームの構成員

『女子ラグビー実績調査アンケート結果』の基本情報に記載されていた、チームの所属団体名と年齢別⁴⁵⁾の所属人数を示す表2を作成した。

チーム名と所属団体名をみると、2つの特徴がみられる。第一に、全てのチームの名称に、「ラグビースクール」あるいは「少年ラグビークラブ」⁴⁶⁾という言葉が含まれていることである。これは、1982年以前に設立された東北地方の全ての女子ラグビーチームが、子どもたちの活動の場であるラグビースクール内で設立されたことを示唆している。第二に、秋田エコー女子部を除く4チームには、チーム名に「ママさん」が含まれていることである。この「ママさん」が意味するところは、次の2つの史資料からつかむことができる。

第一の資料は、『石巻かほく』の記事⁴⁷⁾である。この記事には、宮城県内の女子ラグビーチームと

表2 1982年以前に東北地方で設立された女子ラグビーチームの所属団体名と所属人数

チーム名	所属団体名	所属人数		
		20才代	30才代	40才以上
鹿折ママさんラガーズ	鹿折RS	0名	6名	12名
盛岡RSママさんT	盛岡市協会/盛岡RS	0名	8名	9名
秋田市エコ少年RC女子部	秋田県RF協会/秋田市エコ少年RC	0名	16名	11名
女川RSママさんT	宮城県RF協会	5名	10名	5名
宮城県石巻市RSママさんT	石巻市RF協会、石巻RS	2名	17名	2名

R:ラグビー、F、フットボール、S:スクール、T:チーム、C:クラブ

して、気仙沼、石巻、女川の3チームが紹介され、いずれのチームも、子どもが練習する姿を見てラグビーの魅力にひかれた母親たちで構成されていることが記述されていた。第二の史料は、『女子ラグビー実績調査アンケート結果』のうち、4チームの回答用紙である。それらの回答には、「スクールの父兄会より発足した。」(宮城県石巻市ラグビースクールママさんチーム)(以下「石巻ママさん」と略す)、「現在のチームメンバーは、自分の子供がラグビースクールに入っている親だけ」(女川ママさん)と記載されていた。女川ママさん設立当初からラグビーをしていた阿部氏もまた、「全員がラグビースクールに子どもを通わせているお母さんだった」と証言している。一方、アンケートの回答の中には、「全員が家庭の主婦」(盛岡ママさん)「全員主婦であり、怪我をすれば家庭が大変であるとの事です。」(秋田エコ女子部)といった記載もみられた。

また、年齢別の所属人数をみると、全てのチームが30才以上の女性を中心に構成されていた。5チームのうち2チームに所属していた30才未満の女性は、所属人数全体からすれば1割に満たなかった。こうした結果からも、チームの構成員の多くが30~40才代の小中学生をもつ母親を中心とした主婦たちであったと考えられる。

以上から、1979年から1982年までに東北地方で設立された女子ラグビーチームの構成員は、ラグビースクールに子どもを通わせていた母親を中心とした主婦たちであった。

(2) チーム設立の経緯

チームの具体的な設立経緯を明らかにするため、チームが所属していた2つのラグビースクールの記念誌を検討した。

第一の資料である盛岡ラグビースクールの記念誌からは、盛岡ママさんの設立経緯に関する記述を確認することができた。それによれば、同スクールの指導者が、子どもをスクールに通わせていた何人かの母親たちに「ママさんチームを作ってみては」と奨めたことがきっかけになったとされている⁴⁸⁾。第二の資料である秋田エコの記念誌には、1973年に秋田エコが設立されたときの新聞記事⁴⁹⁾が掲載されていた。それによれば、指導者である秋田不惑ラグビークラブの会長が「健康のために、付き添いのお母さんたちにも一緒にグラウンドを走り回ってもらいますよ」と述べていた一文を確認することができた。また、女川ママさん設立当初からラグビーをしていた阿部氏は、「当時子どもが通っていた女川ラグビースクールの校長が、練習に付き添っていた母親たちに『せっかくみんな来てくれてるんだから。鹿折(気仙沼)のママさん(チーム)があるから、女川も作ったら?』と伝えたことがきっかけになった」と証言している。

以上から、盛岡、秋田、女川の3チームでは、ラグビースクールの指導者たちが、ラグビースクールに通う子どもたちの付き添いの母親たちに、ラグビーをすることを奨めていた。岩手県のラグビーの歴史に焦点をあてた研究⁵⁰⁾には、1970年の岩手国体を契機に、ラグビースクールや

不惑チームが各地で設立され、ラグビーが子どもから大人まで楽しむスポーツへと変化したと述べられている。こうした東北地方のラグビースクールにおけるラグビーの普及は、子どもたちだけでなく、母親たちを中心とした主婦層にも拡がり、女子ラグビーチーム設立に至ったと考えられる。

(3) 練習状況

チームの練習状況を明らかにするため、『女子ラグビー実績調査アンケート結果』に記載されていた、1) 1年間の活動期間、2) 1週間の活動日数及び曜日、3) 1日の活動時間を示す表3を作成した。

表3 1982年以前に東北地方で設立された女子ラグビーチームの練習状況

チーム名	練習の概要			
	1年間	毎週	曜日	1日
鹿折ママさんラグーズ	9ヶ月	1日	日	2時間
盛岡RSママさんT	6ヶ月	1日		2時間
秋田市エコー少年RC女子部	12ヶ月	1日	日	2時間
女川RSママさんT		1日	日	1時間
宮城県石巻市RSママさんT	10ヶ月	1日	日	2時間

R:ラグビー、S:スクール、T:チーム、C:クラブ

表3から、チームの活動は、短いものでは半年、長いものでは1年を単位とし、練習はほとんどのチームが週に1回、週末に約1~2時間行っていたことが明らかになった。その理由として、チームが所属していたラグビースクールとは、不特定の学校に属する小学生または中学生によってチームが構成され⁵¹⁾、活動は学校の授業のない週末に行っている場合が多かったからであると考えられる。一方で、秋田エコー女子部のアンケートの回答用紙には、「夏はナイター7日」との記述を確認することができた。その理由として、「毎週1回の練習では足りなくなり、ナイター練習を計画した」という記述も確認できたことから、一般的にはラグビーのオフシーズンにあたる夏は、日中を避けた夜に毎日実施していたと考えられる。

練習の内容については、いずれのチームもラン

ニングや基本練習から始まり、ポジション別のユニット練習を経て、最後にチームでの動きを確認するという構成であった。一方、女川ママさんと石巻ママさんの場合、小学生低学年や中学年の子どもたちとの合同練習や試合が、練習内容に含まれていた。盛岡ママさんのアンケートの回答用紙もまた「月に1回位5、6年生の子供達と試合をやっておりますが、真剣に親子で体をぶつけてコミュニケーションを図っております。」と記述されていた。これらの記述は、女子ラグビーチームがラグビースクールと同じ時間、同じ場所で活動していたことを示唆している。

以上から、1979年から1982年までに東北地方で設立された女子ラグビーチームは、所属しているラグビースクール内で活動し、子どもたちと合同練習や試合を行っていたことがうかがえる。女性たちの中には、ラグビーの活動を通して子どもたちとコミュニケーションを図ろうとしていた母親たちの存在があった。

(4) 試合状況

チームの試合状況を明らかにするため、『女子ラグビー実績調査アンケート結果』に記載されていた、1) 試合の相手ごとの年間の試合数⁵²⁾、2) 1チームの選手の人数、3) スクラムとタックルのルール、4) 1試合の時間を示す表4を作成した。

表4から、全てのチームの対戦相手が、小学生（男子）と女性であったことを確認できた。小学生との試合についてみると、石巻ママさんの対戦回数が最も多く、前述した練習内容に「低学年・中学年とマッチ」が含まれていたことと一致する。秋田エコーの記念誌⁵³⁾もまた、女性たちと子どもたちが泥だらけになって試合をしている写真が掲載されている（写真4）。さらに盛岡ラグビースクールの記念誌⁵⁴⁾に添付された1979年7月3日の新聞記事には、盛岡ママさんがチームを結成すると同時に子どもたちを相手に試合を行い、2勝1敗の成績を上げたことが記述されていた。このような記述から、当時の女子ラグビーチームとラグビースクールの子どもたちが頻繁に

表4 1982年以前に東北地方で設立された女子ラグビーチームの試合状況

チーム名	最近1年間の試合相手と試合数		試合の際のチームメンバー数	スクラム			タックルの制限	試合時間
	小学生(男子)	女性		メンバー制限	8人の組み方	球だし		
鹿折ママさんラグーズ	3回	1回	15名		③	①	①	20分以下
盛岡RSママさんT	6回	1回	15名	7~8名	*1①②	②	①	15分以下
秋田市エコー少年RC女子部	8回	2回	10~15名	6~8名	②	①③	①	20分以下
女川RSママさんT	3回	2回	15名	7~8名	*2④	③	①	15分以下
宮城県石巻市RSママさんT	17回	1回	7~15名		①②	①	①	20分以下

R:ラグビー、C:クラブ、T:チーム、S:スクール

スクラム組み方：①第1列が組んでから2列3列と順に組む②第1列2列が組んでから3列が組む③8人が一緒に組む④その他
スクラム球だし：①ボールインして後は押してよい②ボールインしてもインした側に出す③ボールをNo.8のところから出す
タックルの制限：①正規のタックルを行う②腰より下のタックルは禁止③タックルは両手で相手にさわれば成立

*1：その時による場合もある

*2：8人一緒に組むが前3人が首を入れるだけ押さない(ママ)



写真4 秋田市エコー少年ラグビークラブの子どもたちと女性たちの試合の様子
(秋田市エコー少年ラグビークラブ創立20周年記念誌p.31)

試合をしていた様子がうかがえる。

対戦相手の子どもたちはこうした女子ラグビーチームについてどのように受け止めていたのだろうか。同誌には、盛岡ママさんと対戦した子どもによって書かれた文章が掲載されていた。以下、『お母さんがんばって』を一部引用する。

ぼくたちのママさんチームは、黄色いジャージーを着て突進してくるんです。太いお母さんも、細いお母さんも、普通のお母さんもいるけど、皆んなぼくたちより大きく、試合の時はこわいくらいです。(中略)

グラウンドで見る黄色いジャージー姿のお母さんは、家にいるときよりずっと若くてきれいに見えます。いつまでも元気で頑張ってください

い⁵⁵⁾。

この文章からは、当時の女子ラグビーチームについて、子どもたちから「ママさんチーム」と呼ばれていたこと、子どもたちの応援を受けながら活動していたことが読み取れる。

試合形式については、全てのチームの選手の数が15人と回答していたことから、主に15人制を実施していたことがわかる。ただし、ラグビースクールは9人制以下のルールが適用されているため、ラグビースクールの子どもたちと対戦する場合は、ラグビースクールのルールに則って行われていた可能性がある。また、全てのチームにおいて正規のタックルが適用されていたが、スクラムのルールはチームによって異なっていた。さらに、試合時間は、全てのチームが正規（40分ハーフ）の半分以下の時間で行われていた。

以上から、1979年から1982年までに東北地方で設立された女子ラグビーチームの試合状況について、1) 対戦相手は小学生か女性、2) 主に15人制を実施、3) 正規のタックルを適用し、スクラムのルールはチームによって異なる、4) 試合時間は15人制の正規（40分ハーフ）の半分以下、の4点を確認することができた。秋田エコー女子部のアンケート回答用紙には、「体力の不足」「各家庭も同様主婦が怪我をすると大変」といった問題点が挙げられていたことから、試合のルールが変則的であった要因として、チームを構成していた主婦たちに配慮していたことが考えられる。

(5) 女性同士のラグビーの試合

先の検討により、全てのチームの試合相手に女性が含まれていたことが明らかになった。『女子ラグビー15年の歴史』（2003）では1984年の世田谷レディースらの試合が初めての女性同士の試合とされていたが、東北地方の女子ラグビーチームはさらに早い時期から女性同士の試合を実施していた可能性が浮かび上がってきた。そこで、どのチームが、いつから女性同士の試合をはじめたのかを明らかにするため、当時の女子ラグビーに関する新聞記事やラグビースクールの記念誌を検討した。

女川ママさんが実施した試合については、前述した女川ママさんの記事⁵⁶⁾に「結成（1980年6月）1週間後に早くも鹿折ママさんラガーズと試合することになり、女川高体育館で即席の練習が毎夜続いた。」と述べられていた。1980年といえば、従来、初めての女性同士の試合とされてきた年を4年遡ることになる。当時の様子について、実際に試合に出場していた阿部氏は「試合ジャージーは子どもたちのお古を着用し、試合が近くなると、平日の夜に集まって、体育館からこぼれた光の下で夜9時まで練習をしていた」と証言している。また、女川ママさんは、翌1981年に岩手県の盛岡ママさんとも試合を実施している。この試合については、盛岡・女川両スクールの記念誌^{57), 58)}に、当時の写真を添えて記述されていた（写真5）。その試合の様子について、その試合のレフリーを担当した人物が、盛岡ラグビース



昭和56年 女川ママさんVS盛岡ママさん ドロンコ試合

写真5 女川ママさんvs盛岡ママさん（1981）
（女川ラグビースクール開校10周年記念誌p.10）

クルの記念誌に以下のように記述していた。

昭和56年11月3日、小雨模様の天候、グラウンドはやや軟弱である。遠来の宮城県女川チームを迎えて県下初の女性ラグビーの試合であり、選手一同大張り切りであった。

（中略）ノックオンによる最初のスクラムのとき、女川チームからクレームがつく。（中略）

盛岡チームはFWの押しを得意とするチームで、またこのスクラム練習に一番力を入れていたので簡単には承服せず、通常ルールを主張するし、女川チームは宮城県内の交流試合においてもスクール方式をとっていると、双方譲らず、試合中のこともあってレフリーの権限により通常ルールで試合を続行することとした。

（中略）ボールの有無に関わらずユニホームを引っ張り合うのは当り前、髪の毛引っ張られては、そしてタックルされ転ばされては怒り出し、普段はまず聞くことの出来ない「コノヤロー」「イテテ…ヤツナ」「ナンダ、オメー」「ヤルカー」等々のバ声までとび出し、その凄いこと凄いこと、笛を吹きながらオビエどおしの40分（20分ハーフ）であった。

盛岡チームに練習量に1日の長あり、勝利をものにしたが金輪際女のラグビーの笛など吹くものかと心に誓った11月3日であった⁵⁹⁾。

このように、試合中に両チームが喧嘩になった理由は、既に宮城県内で鹿折ママさんラガーズ（以下「鹿折ママさん」と略す）と交流試合を実施していた女川ママさんと、この試合が初めての女性同士の試合だった盛岡ママさんの間で、適用していたスクラムのルールが異なっていたからだと考えられる。この試合をきっかけに、以降も女川ママさんと盛岡ママさんとの交流は継続し、1989年の女川ラグビースクールの記念誌⁶⁰⁾には、ママさんチーム同行の盛岡遠征が主な行事に位置づけられるまでになっている。

『女子ラグビー実績調査アンケート結果』のうち、秋田エコー女子部のアンケートの回答用紙に

は、1985年時点で秋田県内には、秋田エコーを含む4つの「ママさんチーム」の存在があると述べられていた。確かに1988年以前に設立された女子ラグビーチームをまとめた表1によれば、1980年から1984年までに秋田県では4つのチームが設立されていることがわかる。しかし、それらのチームがいつから交流するようになったのかは、この史料からは明らかにならなかった。

以上から、国内における初めての女性同士のラグビーの試合は、現段階では1980年に宮城県内で実施された試合まで遡ることができた。また、1981年以降の岩手県と宮城県の女子ラグビーチームの交流の発展は、女性たちが遠征を伴う試合に出かけ、採用していたそれぞれのルールを統一し、定期戦へと発展させていった状況を示すものであった。

(6) ラグビーをしていた女性たちのラグビー観

1979年から1982年までに東北地方でラグビーをしていた女性たちは、ラグビーの何に魅了され、活動を発展させていったのだろうか。すなわち、彼女たちのラグビー観は、どのようなものであったのだろうか。ここでは、女川と盛岡のラグビースクールの記念誌、『女子ラグビー実績調査アンケート結果』、女川ラグビースクールに子どもを通わせていた母親の一人である阿部氏の証言の検討から、当時ラグビーをしていた女性たちのラグビー観に迫りたい。

女川ラグビースクールの記念誌⁶¹⁾には、ラグビーをしていた女性たちにとってのラグビー観と読み取れる記述を確認することができた。具体的には、ラグビーの魅力について「タックルを決めたときの瞬間」「ボールを持って走っている時」といったラグビーのプレーに関することと「満足感、相手も含めた連帯感」「たくさんのママさんラガーとの交流」といった仲間との交流に関することであった。『女子ラグビー実績調査アンケート結果』もまた、「無理せず楽しく汗を流せるのが魅力」「(練習の)あとのコミュニケーションが楽しい」(盛岡ママさん)の他、「健康の維持、友

人が多くなった」(秋田エコー女子部)といった健康維持に関する記述を確認することができた。50歳過ぎまでラグビーを続けた阿部氏もまた、「集まって楽しんで、試合後に交流すること」と述べている。以上のように、当時ラグビーをしていた女性たちは、ラグビーのプレーそのものを楽しみながら、ラグビーを通じた仲間との交流や健康維持のためにラグビーをしていた。

一方、盛岡ラグビースクールの記念誌には、以下のような記述も見られた。

(中略) 私達はラグビーの持つあの勇猛さを求めた訳ではありません。女性にでも出来る楽しいゲームとしてのラグビーと、そして練習のあとの皆さんとの語らいが大きな魅力でありました。

(中略)

男性はラグビーを“楽苦備”と言うそうですが、私達は“楽美医”と考え、皆んなで思いきりグラウンドを駆回り、そのあとで楽しいミーティングを持ちながらママさんラグビーを楽しんでまいりたいと思っております⁶²⁾。

このような記述からは、当時ラグビーをしていた女性たちの中には、女子ラグビーと男子ラグビーは追求するものや魅力が異なると認識し、女子ラグビーを「ママさんラグビー」と呼んでいた女性たちが存在したことがうかがえる。

以上、第3章では1979年から1982年までに東北地方で設立された女子ラグビーチームに着目し、チームの構成員・設立経緯・活動実態・女性たちのラグビー観について検討した。ここでの検討の結果、全てのチームがラグビースクールに通っていた子どもの母親を中心とした主婦たちによって構成されていた。女子ラグビーチームの中にはラグビースクールの指導者たちの働きかけによって設立されたチームもみられ、男性指導者の支援や子どもたちの応援を受けながらラグビースクール内で活動が行われていた。主な練習や試合相手はラグビースクールの子どもたちであったが、1980

年以降は女性同士の試合が行われ、隣県のチーム同士で定期戦が行われるまでに発展した。当時ラグビーをしていた女性たちのラグビー観は、ラグビーそのものを楽しみながら、ラグビーを通して仲間との交流や健康を維持することを重要視していた。すなわち、彼女たちはラグビーをレクリエーションとして楽しんでいたと考えられる。

4. おわりに

本研究では、国内の女子ラグビー統括組織であるJ.W.R.F.が創立された1988年以前に設立された女子ラグビーチームの活動と国内における女子ラグビーの組織化を解明することを目的とした。この目的のために、1988年以前に設立された女子ラグビーチームのチーム数、設立年、所在地と、1979年から1982年までに東北地方で設立された女子ラグビーチームについて検討を行った。以下に、本研究の検討により明らかになった内容を概観し、考察を行う。

- (1) 1988年以前には、国内において26の女子ラグビーチームが設立されていた。従来の文献では言及されてこなかった1982年以前には7チームが設立され、そのうち2チームは近畿地方、5チームは東北地方で設立されていた。
- (2) 日本の女子ラグビーの歴史は、女子ラグビーチーム設立という視点で検討した場合、その起点を1968年まで遡ることができた。最も早期に設立された女子ラグビーチームは、大阪ラグビースクール内で設立された中学生以下の女子チームであった可能性がある。
- (3) 1983年以前に設立されたチームのうち、「盛岡ママさん」「女川ママさん」「三宅マラガーズ」「ブラザー工業女子ラグビー部」の4チームが、1988年のJ.W.R.F.登録、あるいは第1回交流大会出場時には、「レディース」を含むチーム名に変更していた。
- (4) 1979年から1982年までに東北地方で設立さ

れた女子ラグビーチーム：

- 1) ラグビースクールに子どもを通わせている母親を中心とした主婦たちによって構成されていた。
 - 2) ラグビースクールの指導者の提案をきっかけに設立されたチームがみられた。
 - 3) ラグビースクール内で活動し、子どもたちと合同練習や試合を行っていた。
 - 4) 採用していた試合のルールは、変則的であった。
 - 5) ラグビーをしていた女性たちのラグビー観は、ラグビーを楽しむこと、ラグビーを通して交流すること、健康を維持すること、の3点を重要視していた。
- (5) 女性同士の試合は、1980年には宮城県内で、1981年には隣県で実施されていた。本研究によって確認できた国内における女性同士のラグビーの試合としては、1980年の鹿折ママさんと女川ママさんの試合が最古である。

従来の文献では、国内における女子ラグビーの歴史は、女性同士の試合を実施した3つの女子ラグビーチームが設立された1983年を起点に語られてきた。しかし、本研究の結果から、1982年以前に近畿・東北地方で女子ラグビーチームが設立、1980年には宮城県内で女性同士の試合が実施されていたことが明らかになった。現時点の調べでは、最も初期に設立された女子ラグビーチームは1968年に地域クラブ内で設立された中学生以下の女子チームの可能性もある。日本における初めての女子サッカークラブが1966年に設立されている⁶³⁾ことから、国内において女子児童・生徒たちが地域クラブでサッカーやラグビーを始めたのは同時期であった。また、その時期は、「女性スポーツ」拡大の時期⁶⁴⁾、すなわち女性には無理だとされてきたスポーツに女性たちが挑戦し始めた時期にあてはまる。

本研究で明らかになった1988年以前に設立された26の女子ラグビーチームのうち、1979年から1982年にかけて東北地方で女子ラグビーチームが

集中的に設立された要因として、所在地の特徴が考えられる。最も早期に交流試合を行った鹿折ママさんと女川ママさん、そして石巻ママさんの所在地は、共に宮城県の沿岸部に位置する。また、1981年から女川ママさんと交流試合を開始した盛岡ママさんは、岩手県の中心部に位置する。これら4チームの設立年の約10年前にあたる1970年には、岩手県で国体が開催されていた。それを契機に、スポーツが幅広い年齢層に普及されるようになり、ラグビースクールが各地で設立されるようになった⁶⁵⁾。ラグビーの普及は、ラグビースクールの対象である子どもたちだけでなく、子どもを通わせている母親たちにも広がった。そして、母親を中心とした主婦たちで構成された女子ラグビーチームが誕生したと考えられる。また、上記の4チームの所在地の近隣である岩手県釜石市には、1979年から1985年まで日本選手権を7連覇した新日鐵釜石ラグビー部⁶⁶⁾が存在していた。このように、1970年代以降の東北地方には、1) 幅広い年齢層に楽しむスポーツとしてラグビーが普及された、2) ラグビー熱を高める町が存在していた、という2点の特徴がみられた。こうした地域の特徴は、他の地域に比べ女性たちがラグビーに親しむ環境に適合していたと考えられる。

検討を進める中で、多くの女子ラグビーチームの名称に「ママさん」が含まれ、また、史資料や証言の中に「ママさん」が多く用いられていた。当時「ママさん」スポーツの代表的なものとして「ママさんバレーボール」（以下「ママさんバレー」と略す）が存在した。高岡⁶⁷⁾によれば、1964年の東京五輪でバレーボール女子日本代表チームが金メダルを獲得したことをきっかけに、全国的にバレーボール熱が高まり、主婦層もバレーボールを日常的に楽しむようになった。それまで既婚の女性が家庭を離れて集団でスポーツを楽しむという習慣は日本には見られなかったとされる。ママさんバレー誕生は1970年代の国内における女性のスポーツとの関わり方の変化を表し、ママさんラグビーもその例外ではなかった。以上、本稿で明らかにした1979年から1982年までに

東北地方で設立された女子ラグビーチームは、主婦層の女性たちがレクリエーションとしてラグビーを楽しんでいた「ママさんチーム」であった。

このように、ラグビーにおける「ママさんチーム」の普及はママさんバレーの事例と、地域クラブでの女子・児童への普及は女子サッカーの事例とそれぞれ一致する。年齢別女性のスポーツ参与率⁶⁸⁾をみると、1957年と1965年に比べ、1979年と1985年は急増している。中でも、前者は20代前半から加齢とともに減少していくのに対し、後者は20代前半から20代後半にかけて減少し、その後30代後半まで増加傾向がみられる。このようなデータの背景には、高岡が言及したように、バレーボール、ホッケー、バスケットボールなど複数の競技において「ママさん」ないし「家庭婦人」などが名称に含まれた大会が開催されたこと⁶⁹⁾などにみられる社会現象との関わりがあると考えられる。これら先行研究は、ラグビーには触れてこなかったが、本研究によりラグビーもまた同様の動向があったことが明らかになった。

また、本研究の検討により、先行研究における他の女性スポーツにみられなかった、ラグビー特有の経緯を2点確認することができた。

第一に、「ママさんチーム」でラグビーを始めた女性たちが、子どもたちがラグビースクールに通ったことを契機に、ラグビーに挑戦した点である。この点は、1970年代から1980年代の国内の女性スポーツの歴史において、それまで女性には無理だとされてきたスポーツに、女性たちがどのようなきっかけで参入していくのかについての新しい視点をもたらしたといえよう。

第二に、1980年代半ばにチームの名称が変化したという点である。設立時期からみると1982年以前は「ママさん」、1983年以降は「レディース」がチーム名に多く用いられていた。また、1980年代後半になると、それまで「ママさん」や「女子」を含む名称を用いていた複数のチームが、「レディース」を用いたチーム名に変更した。こうしたチーム名の変遷は、女性が置かれた社会状

況とスポーツとの関わりを今後明らかにしていくための視点になることが示唆された。

最後に、本研究により、1982年以前に設立された女子ラグビーチームの存在が、これまで女子ラグビー史上に浮かび上がってこなかった理由は、1) 1982年以前の女子ラグビーに関する史資料の散逸、2) チーム名変更に伴い、1983年以降の設立年のみがJ.W.R.F.の資料に残されていた、の2点が考えられる。女子フットボールの先行研究⁷⁰⁾によれば、戦前には高等女学校内でさまざまな形態のフットボールが実施されていたとされる。こうした先行事例は、ラグビーにおいても新たな歴史発掘の可能性を示唆している。今後、歴史をさらに遡る一方で、1983年以降に設立された女子ラグビーチームの活動やJ.W.R.F.創立に至る過程について検討を進め、国内における女子ラグビーの組織化について明らかにしていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、聞き取り調査にご協力いただきました阿部裕子氏はじめ、史資料をご提供いただきました国内における女子ラグビー関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

注および引用・参考文献

- 1) 本論文では、ラグビーフットボールをラグビーと略し、女子・女性同士が行うラグビーを「女子ラグビー」、男子・男性同士が行うラグビーを「男子ラグビー」と表記する。他のスポーツも同様である。また、本文中の女子児童・生徒は「女子」、それ以外は年齢問わず総じて「女性」と表記する。
- 2) 日比野弘：『日比野弘の日本ラグビー全史』、ベースボール・マガジン社、2011年、20頁。
- 3) 前掲『日比野弘の日本ラグビー全史』21頁。
- 4) 前掲『日比野弘の日本ラグビー全史』33頁。
- 5) Robin McConnell, 'RUGBY', Karen Christensen, Allen Guttmann, Gertrud Pfister (eds), "International Encyclopedia of Women and Sports", Volume 2, Macmillan Reference USA, New York, 2001, pp.958-959.
- 6) 日本スポーツとジェンダー学会編：『データでみる スポーツとジェンダー』、八千代出版株式会社、2016年、1頁。
- 7) トニー・コリンズ著、北代美和子訳：『ラグビーの世界史』白水社、2019年、333-336頁。
- 8) 前掲 "International Encyclopedia of Women and Sports", p958.
- 9) 来田享子：「日本における女性競技スポーツの普及と国際化に関する一考察」、『体育史研究』14巻、1997年、59-77頁。
- 10) 木村華織：「日本の女性スポーツ黎明期における女子水泳の組織化—日本水上競技連盟と日本女子水上競技連盟の組織統一に着目して—」、『スポーツとジェンダー研究』第13巻、2015年、39-55頁。
- 11) 内海和雄：「女性スポーツの誕生」、『広島経済大学研究論集』第40巻、第4号、2018年、1-21頁。
- 12) 崎田嘉寛、寶學敦郎、藤坂由美子、近藤剛、田邊圭子、津内香：「戦前日本における女子フットボールの様相に関する歴史的基礎研究」、『体育学研究』第66巻、2021年、311-326頁。
- 13) 寺田瑛：『女子の運動競技』日本評論社、1923年、130-131頁。
- 14) 前掲『女子の運動競技』109-110頁。
- 15) 笹生心太：「1960年代から70年代初頭における女性のスポーツ参加の抑制と促進—主婦のスポーツ施設利用に着目して—」、『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第51号、2016年、39-48頁。
- 16) 高岡治子：「家庭婦人スポーツ活動における『主婦性』の再生産：ママさんバレーボールの発展過程と制度特性を中心に」、『体育学研究』第53巻、第2号、2008年、391-407頁。
- 17) 大貫哲義：『日本女子サッカーマニュアル

- BOOK』日本テレビ放送網、1994年、77頁。
- 18) 東明有美、入口豊、山科花恵、松原英輝：「女子サッカーの日米比較研究(Ⅱ)―日本女子サッカーの歴史と現状について―」、『大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門』第51巻、第2号、2003年、433-451頁。
- 19) 西山敏子：「女子のキッキング・ゲーム その歴史とアメリカの女子サッカー規則 付随―DGWS」、『神戸女学院大学論集』神戸女学院大学研究所、第19巻、第3号、1973年、33-54頁。
- 20) 前掲『データでみる スポーツとジェンダー』2頁。
- 21) 日本女子ラグビーフットボール連盟：『女子ラグビー15年の歴史』日本女子ラグビーフットボール連盟、2003年、3頁。
- 22) 前掲『日比野弘の日本ラグビー全史』612頁。
- 23) 前掲『女子ラグビー15年の歴史』3頁。
- 24) 世田谷レディースラグビーフットボールクラブ作成：『女子ラグビー実績調査アンケート回答用紙』1985年回答。
- 25) 世田谷レディースラグビーフットボールチーム作成：『女子ラグビー実績調査アンケート回答一覧表』1985年6月9日調べ。
- 26) これらの史料は、J.W.R.F.創設者の一人である川口敬子氏によって保管されていた。24)の原本（1985年4月1日現在）は、13チームのものが残されていた。25)には、上記13チーム及び大阪RS女子の回答と、「三宅ヤングラガースクール」の名前を確認することができた。
- 27) 『全国女子ラグビー連絡会結成の案内文』1987年。この史料には、作成された年が記載されていなかった。しかし、そこには「10月10日を連絡会結成の日としたい」という文を確認することができた。また、連絡会結成賛成のチームには名古屋レディースを確認することができた。同チームの設立が1987年4月であること、J.W.R.F.創立が1988年4月であることから、連絡会結成の日とは「1987年10月10日」であることがわかる。したがって、この史料は1987年に作成されたものである。
- 28) 大会運営委員会：『第1回関東地区女子ラグビー交流大会』日本女子ラグビーフットボール連盟、1988年。
- 29) 前掲『女子ラグビー15年の歴史』3頁。
- 30) 同上。
- 31) 同上。
- 32) 高濱直子作成：『日本女子ラグビーフットボール連盟登録チーム・人数の変遷 1988～1996』1996年。
- 33) 盛岡ラグビースクール：『盛岡ラグビースクール15周年記念誌』盛岡ラグビースクール、1983年。
- 34) 女川ラグビースクール：『女川ラグビースクール開校10周年記念誌』女川ラグビースクール、1989年。
- 35) 秋田市エコ少年ラグビークラブ：『秋田市エコ少年ラグビークラブ創立20周年記念誌』秋田市エコ少年ラグビークラブ、1993年。
- 36) 阿部裕子氏（女川ラグビースクールママさんチームおよび女川レディース元選手）聞き取り調査、調査日：2017年10月16日、場所：阿部氏のご自宅。
- 37) 中京大学倫理審査委員会、承認番号No.2017-047。
- 38) 前掲『女子ラグビー15年の歴史』3頁。
- 39) 「女性ラガースクラム固く 16チームで連盟旗揚げ」、『朝日新聞』朝刊3社、1988年3月29日（29頁）。
- 40) 前掲『第1回関東地区女子ラグビー交流大会』7-19頁。
- 41) 「水沢レディース」の記録を史料1～3とJ.W.R.F.登録チームから確認することができなかった理由は、設立時期（1988年10月）が、J.W.R.F.創立（1988年4月）後、第1回女子ラグビー交流大会（1988年11月）の1ヶ月前だったからであると考えられる。

- 42) この回答一覧表には、大阪ラグビースクール女子チームの設立年が、「S43（中学生以下女子チーム） 47（OGチーム） 50（ママチーム）」と記録されていた。この記録にあるSは昭和、OGチームはOld Girlsチームの略称であると考えられる。いずれのチームもラグビースクール内で設立されたことから、OGチームはラグビースクールの卒業生によって構成されたチームであると考えられる。
- 43) 前掲「女性ラガースクラム固く 16チームで連盟旗揚げ」(29頁)。
- 44) 前掲『女子ラグビー15年の歴史』3頁。
- 45) この史料には、1)10才代、2)20才代、3)30才代、4)40才以上、の4つの年齢層に分けて所属人数が記載されていた。1982年以前に設立された東北地方の5チームのうち、10才代は0人であった。
- 46) 本稿で使用する「ラグビースクール」には、少年ラグビークラブも含まれている。
- 47) 「ボール追う気分は最高」、『石巻かほく』第1779号、1986年1月11日（1頁）。
- 48) 前掲『盛岡ラグビースクール15周年記念誌』36頁。
- 49) 「“チビッ子ラガー”誕生」、『読売新聞秋田版』、1973年6月14日（21頁）。
- 50) 原英子：「岩手県のラグビー(1)岩手県のラグビーの歴史的動向」、『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』第16号、2014年、31-36頁。
- 51) (公財)日本ラグビーフットボール協会：「日本協会登録ラグビースクール一覧」2017年、<https://www.rugby-japan.jp/RugbyFamilyGuide/Rugby-school.html>。(2018.5.8閲覧)。
- 52) 『女子ラグビー実績調査アンケート結果』には、1)小学生（男子）、2)中学生（男子）、3)高校生以上（男子）、4)女性の4段階に区別して試合回数が記載されていた。そのうち、中学生（男子）と高校生以上（男子）を相手に行われた試合は0回であった。
- 53) 前掲『秋田市エコー少年ラグビークラブ創立20周年記念誌』31頁。
- 54) 前掲『盛岡ラグビースクール15周年記念誌』37頁。
- 55) 前掲『盛岡ラグビースクール15周年記念誌』39頁。
- 56) 前掲「ボール追う気分は最高」(1頁)。
- 57) 前掲『女川ラグビースクール開校10周年記念誌』10頁。
- 58) 前掲『盛岡ラグビースクール15周年記念誌』写真集。
- 59) 前掲『盛岡ラグビースクール15周年記念誌』37頁。
- 60) 前掲『女川ラグビースクール開校10周年記念誌』9頁。
- 61) 前掲『女川ラグビースクール開校10周年記念誌』40～42頁。
- 62) 前掲『盛岡ラグビースクール15周年記念誌』38頁。
- 63) 前掲『日本女子サッカーマニュアルBOOK』77頁。
- 64) 前掲『データでみる スポーツとジェンダー』2頁。
- 65) 前掲「岩手県のラグビー(1)岩手県のラグビーの歴史的動向」31-36頁。
- 66) ベースボール・マガジン社：『ラグビー「戦後70年史」：1945-2015：永久保存版』ベースボール・マガジン社、2015年、31頁。
- 67) 前掲「家庭婦人スポーツ活動における『主婦性』の再生産：ママさんバレーボールの発展過程と制度特性を中心に」、391-407頁。
- 68) 江刺正吾：『女性スポーツの社会学』不昧堂出版、1992年、107頁。
- 69) 前掲「家庭婦人スポーツ活動における『主婦性』の再生産：ママさんバレーボールの発展過程と制度特性を中心に」391-407頁。
- 70) 前掲「戦前日本における女子フットボールの様相に関する歴史的基礎研究」311-326頁。

(2021年5月26日受付)
(2022年4月12日受理)